



季節表す「二十四節季」

2月1日に国立天文台が、来年の春分の日は3月20日と発表しました。この春分、立春、夏至などの季節の呼び方を「二十四節季(にじゅうしせつき)」と言います。二十四節気は2500年以上前に古代中国の黄河流域で作られ、6世紀ごろ日本に伝わりました。中国と日本は緯度経度が異なるため、日本の季節感とは異なっているとところもあったため、少しずつ日本の季節に合うように進化を遂げてきました。

立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑
立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒



この二十四節季ですが、立春は2月3日から5日の間、秋分は9月22日から24日の間など、年によって変わります。それは、地球が太陽の周りを一周するには、正確には365日と約6時間かかり、ずれが生まれるからです。そのずれを調整するために4年に一度の「うるう年」が設定されているのです。さらに、うるう年でも調整し切れないうるう年は、400年間にうるう年を3回減らして、一年間を調整しているのです。

今年の立春の日に、ニュースで「暦の上では春」という声が聞こえてきました。その日は10℃を下回っていて、「春どころの騒ぎではないなあ。」と思っていましたが、周りの環境をよく見てみると、中庭の梅の花はつぼみを膨らませ、季節の移ろいを知らせてくれていました。日本には季節が細やかに分けられており、このような情緒豊かな暦を作った民族は世界の中にもほとんどいないのではないかと思います。今一度、日常生活の中で季節の変化を五感で味わいながら、子供たちと共に感性を養っていきたいと思います。

●ひこうきぐも✈ vol.27

マドリッドから、ロンドン経由の飛行機に乗り、日本へ向けて飛行機は滑走路を静かに離陸、のはずでした。このとき、飛行機の中に日本人の学生グループが殆どを占めていたのが運の尽きて、10時間以上の飛行機の中は、しゃべり声が絶えず聞こえ、旅の疲れを癒そうにもそれができずに、私は少々いらついていた。そのときです、隣にいた女性もそのことが気になったらしく、私に苦笑いをしました。私もそれについつい相槌を打つような形で苦笑いを返しました。眠ることもできないので、その女性と旅の話をしていました。その方は、八木波奈子さんといって、雑誌の編集をされているらしく、今回の旅で、イギリスの庭園を取材されたそうです。そして、そのことを日本に帰って本にまとめ、出版するというような内容のことを話されました。また、私も「旅を終えたら教師になるつもりです。」と話しました。すると今後、環境教育の大切さや、私に環境に関するお薦めの本(レイチェル・カーソン著「沈黙の春」)を紹介されました。また、「冬を耐え抜いた木に、小さなつぼみが膨らんでいるのを見つけて、そのことに素直に感動できる子どもたちが育てば、素晴らしいと思う。」というお話をされたのが、今でも強く印象に残っています。その例え話が私の心を強く打ったのです。

その後、八木さんから雑誌「BISES」が送られて来ました。とても素晴らしい本で、八木さんの情熱が注がれていて、再び感動しました。30年前にイングリッシュガーデン何て雑誌は、他のどこを探しても無かったのです。そのとき無職の私は、何だか自分がちっぽけに思えてなりません。私も八木さんの持つエネルギーに負けないように、絶えず飛行機の中での感動を思い出して、教職の道を旅してきました。

「ガーデニング」という言葉は、今ではすっかり日常的に使われていますが、この「ガーデニング」は、1997年の流行語大賞を受賞しています。そのときの受賞者が八木 波奈子さんなのです。

※「ひこうきぐも」は、あくまでも荒木がバックパッカーとして旅をした当時、約30年前の街の様子です。現在とは状況に違いがあることをご了承ください。バックナンバーは一昨年度からの累積です。